

結局は世界、すべては日本人以外のところで価値が決定されてきていたのが、いまや赤坂の芸者でも、国際的日本の議員さんが使用するので、注目をあびる時代が現出する。なにはともあれ我々の予想をはるかに越え、そして裏切る現象として日本文化が輸出される寸前にきていることは、それは巨大な暗間に横たわるエネルギーをなんとなく感じさせる。原理的にいっても、これほどの黒字大国が驚くべき文化の輸入国であることは生理的にも、そう長期間にわたって耐え得るものではない。すでに限界を超えているにもかかわらず、長い間の輸入文化になじんでいる故に輸出に、エネルギーの解放をどうしていいか皆目わからず右往左往しているのが現状だろう。その混乱・混雑にも至らぬ力不足、自己不在の状態は、状況としての作家、画商、情報としてのホンヤク家、批評家、いま、すべては模索の中で本当に担う力がない時、担わされそうで恐怖におののいているといった方がこの事実をうまく説明できそうだ。もう一度繰り返すならば商売として、作家批評家が輸出という具体的な問題として問われ始められたということが出来る。

さて、そうなると実際に、どんな作家がいて、どんな作品があるかということになる。私は相変らずキャンバスを使用して、相変らず古い表現法のままの作家だから、嶋本先生の新しい、真の前衛作品を本当に判っているかどうかは、私自身疑わしいかぎりであるが今回、私は1987年2月20日パリで逮捕された。（ちょうどその時、嶋本先生から顔写真のネガ・スライドを送ってくれと依頼してきた。そのスライドを使って作品を売るということだ。当時忙しく、写真機も故障であったので「ちょっと待って下さい。いま逮捕されて、それをパフォーマンスにしようとして懸命です」という簡単な返事をしたところ、「桜井さんが裁判パフォーマンスをやるということは大変いいことで、私でできることはなんでも協力します」と言ってきて、すぐに直径15センチメートルの大きい輪に9センチメートルの小さい輪が交差している奴である。昨年の夏、私はたまたま大阪で個展をやった時、嶋本先生のAU事務所に顔を出したところ、全世界から送られてきているアートメール作品を見せていただき、随分作品もよくなったなあと感じていると、ひょいと嶋本先生が大きい輪と小さい輪が交差した奴を私の前において「桜井さんは頭がいいからこんなものはすでに御承知でしょうけど」さあ、きたきたと思って、よく見ると大きい輪に小さい輪がからみあっている。絶対に出来ない代物である。これは継いだものではないですか、要するにインチキなしですか？と聞くと、なしと答える。そして「これがアメリカの数学者が頭をネッて、未だに解答できないものです。」と、なに気なく言う。面白いと思ったが教えてくれる筈もなく、教えてもらっては「イケナイ」ものであるから「いや、私は出来ませんがネ」と簡単に答えておいた。